嘘つきの嘘

Ram F

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
嘘つきの嘘

【Ｎコード】
Ｎ４２９５Ｄ

【作者名】
Ｒａｍ　Ｆ

【あらすじ】
数学が大好きで数学でなんでも解けてしまうと思っている僕に見たことがない現象が起きた。

数学の難しさ

僕は、嘘つきだとよく他人に言われる。何故だろうと顧みれど、全く見当もつかない。誤解を生じさせるような表現は用いないし、比較的丁寧な口調だと思う。

しかし、冷静にアナリシスする自分に非がないということは、なんとも言い難(がた)いな。

さて、僕は、本に嘘つきなのだろうか。

初めて嘘つきだと言ったのは誰だったか覚えがないが、僕が「壁だって通れることができるんだ」と教室中に反響させた頃だから、小学生時だったか…。

それだとしても本当のことだし…。残念だが全く思いつかない。

若し、僕が嘘つきなのだとしたら、僕の存在は僕が認識し得(う)る範囲内に在らないのかもしれない。

それはそれで少し興味がある、つまらなかった日常に一つの鉱脈が見つかった気がしたのはこの時なのかもしれない。

僕は、考えてみようと思う。

「何を」と言われても答えなどない。僕が考えるのはその「何」にあるから…。

話しはかわるが、僕は数学というのが好きだ。

時に心をひき、時に滑稽(こっけい)で、愉快である。それは、人間そのものではないか。人間に性格があるように数学にだって性質があり、違いもある。他人に自分の心を理解して欲しい、仲良くしたいという人間らしい感情も数学にはあるんだと僕は思う。

夕顔の合弁花を楽しみながら感慨に耽(ふけ)るのも乙なものだ。

それにしても、数学だと聞いた途端に拒否反応がでる人を多々見掛けるが、なぜなのだろうと僕は考える。

ふと気付けば夕顔も萎んでいた頃合、辺りに轟くものは臓の定常波のみであり、虫の息さえも聞こえそうにない。

そんな景色描写を脳内から疾(と)うに排除して一時(いっとき)経た程合に

「嗚呼、そうか、そうなのか？安易だからこそ複雑なのか」という

ある概念に至った訳である。　数学とは結局

「１＋１＝無限」を考えるものということだろう。我ながら表現が下手な上になんとトートロジーなのだろう。

しかし、今日に於(お)いては正しいと言える。万人は、

「１＋１＝２」と認識しているが、

「１」にも与式にも条件がない以上、どの数学を用いても良いことになる。

もちろん算数では、答えは

「２」であるが数学まで拡張すれば答えは

「０」でもあるし

「１」でもある。将又(はたまた)

「１０」若しくは

「無限」その場、その状況において自らが判断を下さなければならないのが数学の難しさなのだろう。

例えばそれが微分であればその点の傾きが解るからなんなのか、分数を分数で割るとどうして割る方が分母、分子が反対になるのか。

前者であればその点の傾きが分かればある方程式が導きだせる。

後者であれば、割るという作業を解答者は無意識的に難しくしてしまっている場合が多い。

丸いケーキを考えてみる。ただし、このケーキは生クリームも飾りもない半月型とする。

これがこのケーキの条件になり、数学的条件と言える。

そして、
「五人に均等にケーキを配るとすると一人分のケーキは丸いケーキの何分の一になるのか」という問いを付け足してみる。

答えは、
「１０分の１」だが、ここには疑問は少ないと思われる。
しかし、この問いを五人でなく
「２分の１」とすると至極複雑になる。

答えは、
「１」だが、日本語として
「２分の１人」はおかしい。
だが、ここで視点を変えるとこうなる。
「二人の内一人にケーキを配るとすると一人分のケーキは」とすると一人に配るのと同義である。

つまり数学の難しさとは、
「考えることにあるのではないか」という仮説を立てることができる訳である。

考えることが好ましいと思うものには、安易であり、そうでないものには複雑という訳である。　では、数学が通用しないとしたら、面白いと思わないか？

数学の難しさ（後書き）

プロローグなので堅く我ながら小説らしい表現も少ないと思います。次の章から、小説に仕立てていきますので、飽きずに読んで頂ければ本望です。

少年の苦悶

僕は普通の男子高校生で、普通に生活をし、普通に死ぬんだろうと思っている。
それはそれでいいと思っていたし、誰に迷惑をかける訳でもない。

しかし、この通り振る舞いつまらない前途になることを毛嫌いする時も間々あるが、それはそれで良いじゃないかと思っていた。

それでも面白そうなことについつい反射してしまうし、深層では待ち望んでいる。いや、これは語弊だな、僕は待っている訳じゃない。面白いことに巡り逢えない宿命（さだめ）に嫌気が差しているだけだ。
「起きねぇよな面白いことって」と誰に聞かせるでもない自問自答を日毎呈し続ける心はなんと愚かなことよ。

それにしても、片鱗ぐらい示してもいいと思わないか、その為だけではないが数学とか物理だって日々研鑽を積んでいるのに…。

この世は苦悶の世界だ。

今、僕はと言えばそんなことを思慮してしまう自身を自嘲し、徒（だだ）広（ひろ）い公有地にずかずかと我が物顔で闖入している最中である。

しかし、今日だけは多少足取りが勢（はず）む。景色も心なしか僕の胸中を察し、優美な慈雨を散らせていた。この時期には、よくある桜吹雪という雨だ。

「面白くなりそうだ」
なんて信憑性がないことを口遊（くちずさ）んでいるんだと自重する自分が少し

気恥ずかしいが、そんな阿呆らしい行いは軽くそこらに忘れ去り、僕は腰をかけた。

皮肉にもそれから半月が経ても不変的な生活が待ち受けていた。僕が思い描いたようなことは一切起こらなかった。

結局、現実という壁は余りに高く、超越できないものだと、絶望した。

その後は、ただ何も考えず与えられたレールに連結するのみだった。

世界は、上手く出来過ぎているし、時間は不可逆、時間遡行も実質不可能、地球外生命体、未確認飛行物体の公式記録だって信憑性はほとんど皆無。それが面白いか、未確認生物が闊歩するまでは望まないが、せめての事未確認飛行物体ぐらい飛び交っててもいじゃないかと思わないか

逆に思わないやつがいるとするなら、それこそつまらない人だと思う。

そう思い続けていただろうな、あんな留学生として派遣されなければ…。

少年の苦悶（後書き）

次回より本格的な話しになる予定です。

女性と機密

女が僕にとんでもないことを話す。
無論、顔つきは力が入り硝子が遮る目は僕の瞳を放す隙さえ与えないが、彼女の折々観せる左指が金属の枠に軽く触れる仕種は、演技ではないことを見当づけさせた。

しかし、この女は僕の存在を僕だと認識してからも、僕の存在が確定する以前も、有り得るはずがない、現代化学では有ってはならない話をするあばずれだ。

若しそれに偽りがないとするならば、面白いが、未曾有な問題が浮上したことになる。

確かに僕は、面白いことを望んでいたし、この苦悶の世界に絶望していた。
だがだからといって、安易に信じる程、僕は阿呆じゃないしそれなりに常識を弁(わきま)えている。

さすがに物理法則が全能とは言わないが、事象、現象の殆(ほとん)どが解けると言っても過言ではない。
それにしても馬鹿にされているようで不愉快だ。そう思うのは、僕が冷静でいないせいなのか、目の前のあばずれの下らない似非(えせ)話しのせいなのかは、後者が原因で間違いはないだろう。

しかしここは飽(あ)く迄(まで)も冷徹に筋を通そうじゃないか
「貴女の話しはよく解りましたが、具体的な形で示して頂けませんか？詳しい話しはそれからです。」

僕が返答することを予め解析、パターン化していたかのように、いや、していたのだろう。女は
「実に期待通りの答えです。いえ、悪い意味はありませんし、寧ろこちらとしては都合が良いです。非難している訳でもありません。お気に為さらずに」
表情を堅くした覚えはないが、手の裏には楕円型の傷と鮮血が何かを物語っていたことが僕の心に嫌気を刺した。

事の発端は五月、勉学という平日の仕事を果たし、通称放課後と言われる頃合だ。

僕はそそくさと教室から逃走し、昇降口を出た。
陽射が僕を照らした。黄昏に近しい頃合であるのに太陽はまだまだ勢いがあり、広葉樹も葉を青々と茂らせ景色も賑やかに成ろうと努力しているように思える。

こんなことはありふれた日常でただ退屈なだけだが、僕の目先には懸案が明瞭に待ち受けている予感がした。
「何故かって？」目先に灰色のスーツを着用した女性と白い運転用の手袋をした黒スーツの男性、校門には似つかわしくないリムジンで、辺りに人は皆無、男女共に俺を明らかに凝視しているという状況。
これらのことからパターンを想定してみても僕に用件がある方向のベクトルになる。

一瞬裏手を目指そうと思い踵を返してはみたものの、面倒であるし、何よりリムジンに乗っている者が裏手に人を配置していない可能性を考えれば、無駄な余力を費やすことは愚かである。

僕はしかたなく二人に声をかける。

「何かようですか？」微かだが確かに女性は満足そうに微笑んだ。
「なかなかの判断力のようね」初対面の他人に言われる言葉でないが堪えよう
「御誉めありがとうございます。すいませんが忙しいので用件がないのならば、失礼したいのですが」
女性は、辺りを軽く一瞥（いちべつ）し顔を強張らせ
「何も聞かずに乗ってくれる？」
僕は女性の視線が妙に気になり耳をすます、すると先程とは違い昇降口付近が賑やかになっていた。

女性が辺りを一瞥したのは、つまりここでは話しにくいと考えるのが自然である。
この二人の目的が定かでないが、誘拐目的ではないの理解できる。一体何が目的なのだろうか、鎌をかけてみようか
「嫌といったら？」
僕は直ぐ様彼女の一挙一動に神経を集中し周辺視を開始した。
「残念ですがノーの選択肢はありません」僕は彼女の言動には敢えて無視を決め込み無難な返答をする
「行くのはいいんですが僕にも利益が有りますか？」本の一秒程間があり、彼女の左指が金属枠にちょこんと触れた。
「私には、解り兼ねます」態（わざ）と僕は小さく低い声で
「なるほど」と零（こぼ）し
「わかりました」と答えた。

前文はこの車上内のことである。余りにもこの女は愚かであるから、疾（と）うに愛想が尽き聞いているのも億劫（おっくう）になった。しかし慈悲深い僕は
「大まかには解りましたので、もう結構です」と丁寧に
「つまり、地球外生命体が近々コンタクトとしてくるので、僕に出向いて欲しいと、そういう事ですね」

女は満足そうに微笑み、そうですと言わん許(ばか)りの顔つきだ。
そうして車内に心地好い沈黙が流れ始めた。
僕は数学的確率を暫時(ざんじ)考えていたが、表れる数字は期待通り零(れい)が六個付き、1が場違いですねと言っているように思える。
「この際、常識は捨てるとしても何故僕なんですか？僕の知能指数はそれほど高くないですよ？」

女は未だに何か言っているが、僕は早くに視線を外し、ふと、窓を見た。
窓の向こうには馴染みのない場景が自然な場所から擦れ違い、見送っても直ぐに距離が離れて行った。
それは、今の僕と昔の僕との距離のようで
「皮肉だな」ふっと息が抜け苦笑(えみ)が零(こぼ)れた。

女はその表情を律義に観ていたのか
「どうかしましたか？」と不思議そうに投げ掛けた。
「いえ、別に」
女は僕の心境を察したのか肩を落とし、僕から目を背けた。

それから暫くして女が口を開いた
「もうすぐのようね」と一言と言うとゴソゴソと何かしている。
全く気付かなかったが、女は自前(じまえ)のサイドバックを持っていたようでそこから封筒と資料を取り出した。
「これを見てくれる」女はそういうと封筒を右手で手渡した。　受け取るとそこには、開封不可という黒肉(こくにく)にマル秘という朱肉が印されていが、僕は意を決し封を開けた。

女性と機密（後書き）

小説って書くと話しがなかなか前に進まないものですね、そして、飽きずに読んで頂けるか心配です。駄文ですがどうかよろしくお願いします。

手紙

拝啓

今回貴方（貴女）をお呼びしましたのは、今日から十日後地球外から何らかの方法で地球外生命体がコンタクトを試みてくると確かな情報が入りました。

当初は我々も無視を決め込んでいたのですが、そうもいかなくなってしまったのです。今現在、地球の衛星軌道上に直径三ｋｍの楕円型金属が秒速６０ｍで円運動をしているようなのです。それが何なのかは我々の化学力では推し量ることができませんでした。

一ヵ月前、我々が極秘にしていた宇宙研究所へ暗号化された文書が何処からか発信されました。その暗号化は現代数式ではほとんど解けないもの許（ばか）りでした。

辛（かろ）うじて

「５７４４２分２秒後に行く」

と記されていました。我々は当初、特Ａクラスのハッカーの仕業かと思い、ダブルＳクラスのハッカーを雇ったのですが、詳細は全く不明、それどころか足跡も完璧に抹消されました。いや寧ろ、足跡が辿れる筈がないのです。その送受信が行われるさい世界中に数秒間、高周波数電波障害が発生しました。

それにより電波機器に何らかの影響が起き、送信先の固有波も不明な状況です。

わかっているのはその時間の宇宙空間には高周波数電波の反響が部分的に起き三分後に消滅したことだけです。

正直我々も半信半疑ですが、最悪の結果は避けなければなりません。ですので今回、私の部下を数人派遣いたしました。

無粋な真似をしてしまい申し訳ありません。後のことは、私の部下からお聞き下さい。答えられることがあるかと思います。

敬具

外務省長官

疲労A

「おいおい、外務省って…」これには驚愕した。一端の高校生には、有り得ないことだから、経験なんて勿論ない。

あったとしても地球外生命体という概念を素直に認められる奴がこの地球上に何人いるのだろうか。

まあいたとするならば、友達にはなれそうだが。

しかし、

「しかし有り得ないだろうこれは…。」ぶつぶつと小言をもらしながら、髪を何度も掻きむしった。

その仕種のせいだろうか、女性は手紙を読み終えたと判断し、軽く僕に微笑んだ。

それは信じて頂けましたかと言わん許(ばか)りで、僕は何も言えなくなる。苦難する。

頭の中は、反時計回りにぐるぐると逸物(いちもつ)の不安が循環した。

そのせいだろうか、（＊）……、突然、激しい頭痛と吐気が僕を襲った。

初めは、酔ってしまったんだと思ったのだが、だんだんと色覚が鈍くなり、辺りが黄色く薄れていく、

窓に建ち並ぶビルなんかは、既に視界に入らなくなっていったのだが、ふと見れば違う意味で見えなくなっていた。

終いには聴覚も鈍感になって、意識もなくなってきた。さすがに

おかしいと思い、車の窓硝子に額をつけてはみたが何の効果もない。

仕方なく僕は、女性に状況を説明したのだが、女性は「そうですか」と冷徹に答え何の対応もしてはくれなかった。

怒りを呈したところで何の解決にもならないと感じ、僕は眠ることにした。

話しは変わるが、朦朧(もうろう)とする意識内でも僕を苦難させていたものは、逸物の不安と選ばれてよかったという安心感、そして、彼女等への怒りだった。

疲労Ａ（後書き）

次話から、本格的にＳＦ始動です

疲労B

彼らが車上で手紙を読んでいるだろう頃、私は決断を迫られていた。

「ですから、我々全体の力が必要なのです。お手元の資料をご覧下さい。記載してあるデータの通り、多少の破損があるものの情報操作事態は地球人類では不可能だと推測できます。仮にこれが間違いだとしても、最悪の事態を避けるべきだと思慮します。よって然るべき対応をとるべきだと…」

私は、この発言を嘲笑うかのような静けさが嫌だった。どこを向いても蔑んだ目や、視線を合わそうとしない冷たい真冬の寒さが嫌だった。

しかし、それでも僅かばかり賛同する者がいるらしく、それが唯一の救いである。敵は全てでないといった安心感は、冷えきった私を暖かく迎えてくれた。

突然、一人の男が立ち上がり拍手をしだした。一面の視線はその男に向けられ、どよめきがわき静けさを一蹴した。

私もこのような公の賛同を得られるとは予定外であったから驚愕した。

私自身この非化学的な話を完全に信じている訳ではない。証拠となりえる資料を見てもなにかの間違いだと今でも思うぐらいである。

外務省長官でなかったのなら、賛同の少数派になれただろうか…。

しかし、よく考えて見れば賛同の拍手にしてはテンポがゆったりしているのはおかしい。　どちらかといえば、私を蔑んだ感情の表れではないだろうか。

一度そんなことを考えてしまった私はこの男に異様な怒りを覚え、冷徹な眼で見始めた。

すると男は、拍手を止め口を開いた。

「さすがは、長官、すばらしいお考えですね。地球外生命体について議会案を出すなんて本当にすばらしい。ですが、ここは予算やら、景気回復やらについて思案する場所であり、こんなつまらないよた話を語る場所ではないことをご存じですよね。皆さんはどうお思いですか？時間の無駄だと思いませんか？」

正直な話こうなることは、わかったいた。

現在の景気を考えれば、こんな非化学的話に時間を掛ける余裕などないこともわかっていた。

しかし、しかしそれでも私は最悪の事態を避けたいだけなのだ…。

やたら激しい効果音を背に潔く退出した。

魔人と道徳

私は個室で公務をこなしながら、彼らを待っていた。勿論、議員やらエリート官僚やらの枠組みの奴等のことではない。

かといって一般的遺伝子をもった大多数の人々という枠組みでもない。

彼らを枠でくくるとするならば

「変異遺伝子」または

「ミュータント」とでも言おうか、そんな名称の彼らを待っていた。

何故私が彼らを待ち望んでいるのかと言えば、簡単なことだ。

そのすばらしい能力（さいのう）を利用するため…。聞こえは悪いが結果的にはそういうことになる。

場合によっては個々の能力を開花させる訳だから、喜ばれるかもしれない。

随分楽観的だが、そう思っておこう。

しかし、利用するにも問題がいくつかある。その一つに彼らのほとんどが能力に気付いていないということがあげられる。まあそれは我々（人間）にとって好都合でもあるのだが…、今はその能力が必要な時なのだ。

「しかたない、しかたないのだよ。そうしなければ…終わりだ」

社会的、道徳的な甘ちょっろい綺麗ごとに時間を割いている余裕なぞ欠片もない、いや倫理やら道徳やらが悪いという訳では決してな

い。

私が言いたいのは、それらに縛られてしまって、すべきことをし損ねてしまっては本末転倒ではないか。私は国民の為ならば、悪魔とも契約を交わそう…。

それから数時間経ったのだがなんの連絡もない。必ず連絡するよういったのだが、私の携帯も個室の受話器も音信不通だ。

暫くは落ち着きながら公務をまっとうしていたのだが、秒針が回るにつれて居た堪らなくなった。

それでも公務はまっとうすべきものだし、国民の期待を裏切る訳にはいかない、脳内から軽く焦燥を排除して仕事を続けた。

気付いた頃には室内灯の明かりが既に点灯していた。

「もうそんな時間か」

魔人と道徳（後書き）

正直サブタイトルに自身がありません

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4295d/

嘘つきの嘘

2010年10月28日08時52分発行